

藤田嗣治 作品をひらく

林 洋子 著

近代日本の美術体験を縮くつえで、藤田嗣治の辿った軌跡は無視できない。陸軍軍医総監・嗣章を父にもつ出自。戦前のエコール・ド・パリにあって「乳白色の下地」と面相筆による裸婦像により、東洋人として勝ち得た例外的な名声。さらには陰惨な戦争画への傾倒と、戦後の国外亡命・国籍離脱。そして晩年のカトリックへの帰依と、没後の著作権問題に関わる訴訟の数々。

本書は、毀誉褒貶に揺れるその生涯の振幅に挑む。数々の評伝とは一線を画し、一次史料発掘を手がかりに、神話・醜聞の堆積の下に隠されてきた作品生成の現場に迫る。膨大な資料を整理する手際には、「詰将棋」の手堅さがある。

藤田独特の地塗り技法は、なお解明途上にある。一九二〇年代の下地は、鉛白に石膏ないし石灰を膠で練り合わせたもの、という。著者は最新の修復報告に、日系米人画家・ヘンリー・杉本宛の、未刊の藤



(名古屋大学出版会・五、二〇〇円)
▼はやし・よつこ 65年生まれ。京都造形芸術大准教授。

神話はぎ絵画生成の現場に迫る

田書簡を寄り添わせる。水性の墨を油性・半油性の地に乗せるために、藤田はベビーパウダーを利用したようだ。素肌の「白」を描くためには、画布の肌造りが不可欠だ。藤田の手仕事への傾倒は、ミシンを操る裁縫の腕前から、自前の額縁拵え、画室のミニチュア制作や、晩年の玩具造りにも発揮される。

その没入型の職人氣質は、一方で巨大な構図設定の不得意ぶりに結びつき(パリ国際大都市・日本館壁画構想で放棄された巨大な下絵、他方で、社会の動きに対応する如才なさ、あるいは時流便乗の「無節操」とも呼ぶ)。だがこの両面は、敗色濃厚な戦局下、巨大な殺戮図が量産体制に入るや、皮肉にも相殺されて止揚される。土門拳も慧眼に見抜いたとおり、《アツツ島玉砕》以降、構図不在の即興制作と「戦意高揚」の破綻とが競合して、藤田に鬼気迫る作品を描かせたからである。

藤田は自作の玉砕図に「寶錢を投げて額づく民衆の姿に戦慄を覚え、芸術家たる社会的使命を自覚した」という。職人芸が「彩管報国」に同調しえた時局にあって、芸術家の「良心」とは何なのか。本書はこうした問いかけに禁欲的だが、それだけに貴重な学術的里程標となるだろう。

国際日本文化研究センター教授
稲賀 繁美